文覚荒行

そもそもかの頼朝と申すは、去る平治元年十二月、父、左馬頭義朝が謀反によって、年十四歳と申しし永暦元年三月二十日伊豆国蛭島へながされて、二十余年の春秋をおくりむかふ。年ごろもあればこそありけめ、今年いかなる心にて謀反をばおこされけるぞといふに、高雄の文覚上人の申しすすめられたりけるとかや。

かの文覚と申すは、もとは遠藤武者盛遠とて、上西門院の衆なり。十九の歳、道心おこし出家して、修行にぞいでにける。

熊野へ参り那智ごもりせんとしけるが、行のこころみに、きこゆる滝にしばらくうたれてみんとて、滝もとへぞ参りける。ころは十二月十日あまりの事なれば、雪降り積もりつらゐて、谷の小河も音もせず。嶺の嵐ふきこほり滝の白糸垂氷となり、みな白妙におしなべて、四方の梢も見えわかず。しかるに文覚、滝つぼに下りひたり、頸きはつかって慈救の呪をみてけるが、二三日こそありけれ、四五日にもなりければこらへずして、文覚うきあがりにけり。数千丈みなぎりおつる滝なれば、なじかはたまるべき。ざっとおしおとされて、かたなの刃のごとくに、さしもきびしき岩かどのなかを、うきぬしづみぬ、五六町こそながれたれ。

時にうつくしげなる童子一人来って、文覚が左右の手をとってひきあげ給ふ。人、奇特の思ひをなし、火をたきあぶりなンどしければ、定業ならぬ命ではあり、ほどなく生きいでにけり。文覚すこし人心地いできて、大のまなこを見いからかし、「われこの滝に三七日うたれて、慈救の三洛叉をみてうど思ふ大願あり。七日だにも過ぎざるに、なに者がここへはとってきたるぞ」といひければ、見る人身の毛よだってもの言はず。また滝つぼにかへりたってうたれけり。

第二日といふに、八人の童子来って、ひきあげんとし給へども、さんざんにつかみあうてあがらず。三日といふに、文覚つひにはかなくなりにけり。滝つぼをけがさじとや、みづら結うたる天童二人、滝の上よりおりくだり、文覚が頂上より、手足のつまさき、たなうらにいたるまで、よにあたたかにかうばしき御手をもって、なでくだし給ふとおぼえければ、夢の心地して生きいでぬ。

そもそもあの頼朝という人は、去る平治元年（1159）12 月、父の左馬頭義朝の謀反によって、14 歳で永暦元年（1160）3 月 20 日に伊豆国蛭島に流され、そこで 20 年あまりの歳月をすごした。その間も機会はあっただろうに、今年（1180）になって、どのように決心して謀反をおこしたのかというと、高雄の文覚上人がすすめたと聞いている。

その文覚というのは、もとは遠藤武者盛遠といって、上西門院に仕えていた侍である。19 歳で道心をおこし出家して、修行にでた。

熊野に参り那智山中で修行しようとしたが、ためしに有名な滝にしばらくうたれてみようと思って、滝壺に行った。頃は 12 月 10 日過ぎのことなので、雪が降り積もり、氷が張って谷の小川は音もしない。嶺から冷たい風が激しく吹きつけ、滝から落ちる水も氷となり、あたり一面真っ白で、四方にある梢も区別できない。だが文覚は、滝つぼに下りて水につかり、首のすぐ下までつかって慈救の呪を唱えつづけたが、二、三日ならまだしも、四、五日続けるとこらえきれなくなって、文覚は浮きあがってしまった。とても高いところからあふれ落ちる滝なので、どうしてとどまることができようか。ざっと押し流されて、かたなの刃のように、きびしくとがった岩かどの中を、浮きつ沈みつして、500 メートルほど流された。

その時かわいらしい童子が一人来て、文覚の左右の手をとって引き上げた。見ていた人が、不思議な力に感動して、火をたいて身体をあぶるなどしたので、寿命が尽きていないこともあり、まもなく生き返った。文覚はすこし正気にもどって、目を大きく怒らせ、「私はこの滝に 21 日間うたれて、慈救の三洛叉を見ようという大願がある。七日にさえなっていないのに、だれがここに連れてきたのか」と言ったので、見る人は恐れてなにも言わない。また滝つぼに戻ってうたれた。

二日目に、8 人の童子が来て、ひきあげようとしたが、さんざんにつかみあってあがらない。三日目に、文覚はついに息絶えてしまった。滝つぼをけがすまいと思ったのだろうか、みづらを結った天童が 2 人、滝の上から降りてきて、文覚の頭の先から、手足のつまさき、手のひらにいたるまで、とてもあたたかくよい香りのする御手で、なでさすっていると気づくと、夢のような気持ちがして生きかえった。

「そもそもいかなる人にてましませば、かうはあはれみ給ふらん」と問ひ奉る。「われはこれ大聖不動明王の御使に、矜羯羅、制吒迦といふ二童子なり。『文覚無上の願をおこして、勇猛の行をくはたつ。ゆいて力をあはすべし』と、明王の勅によって来れるなり」とこたへ給ふ。文覚声をいからかして、「さて、明王はいづくにましますぞ」「都率天に」とこたへて、雲井はるかにあがり給ひぬ。たなごころをあはせてこれを拝し奉る。さればわが行をば、大聖不動明王までも、しろしめされたるにこそとたのもしうおぼえて、猶滝つぼにかへりたってうたれけり。まことにめでたき瑞相どもありければ、吹きくる風も身にしまず、落ちくる水も湯のごとし。かくて三七日の大願つひにとげにければ、那智に千日こもり、大峰三度、葛城二度、高野、粉河、金峰山、白山、立山、富士の嵩、伊豆、箱根、信濃戸隠、出羽羽黒、すべて日本国のこる所なく、おこなひまはって、さすがなほふる里や恋しかりけん、都へのぼりたりければ、およそ飛ぶ鳥も祈りおとす程のやいばの験者とぞきこえし。

「いったいどなたが、このようにあはれみをかけてくださるのですか」と尋ねる。「わたしたちは大聖不動明王の御使で、こんがら、せいたかといふ二童子です。『文覚が無上の願をおこして、勇猛の行をくわだてた。行って力をかしてやりなさい』と、明王の仰せによって来たのです」と答えた。文覚は声をはりあげて、「では明王はどこにいらっしゃるのか」「都率天に」と答えて、雲井はるかに昇った。文覚は手をあわせてこれを拝んだ。それならば私の行を、大聖不動明王までもがご存じなのだと頼もしく思って、また滝つぼに戻ってうたれた。まことにすばらしい瑞相があったので、吹いてくる風も冷たくない、落ちてくる水も湯のようだ。こうして 21 日間の大願をついに成就したので、那智に千日こもり、大峰三度、葛城二度、高野、粉浦、金峰山、白山、立山、富士の山、伊豆、箱根、信濃戸隠、出羽羽黒、すべて日本国のこる所なく、修行をして歩いて、やはり住みなれた地が恋しかったのだろうか、都に上ったので、おおかたの飛ぶ鳥をも祈り落とす程のやいばの験者と評判になった。

文覚被流

かの高雄に神護寺といふ山寺あり。久しく修造なかりしかば、春は霞にたちこめられ、秋は霧にまじり、扉は風に倒れて、落葉のしたに朽ち、甍は雨露にをかされて、仏壇さらにあらはなり。住持の僧もなければ、まれにさし入る物とては、月日の光ばかりなり。文覚これをいかにもして、修造せんといふ大願をおこし、勧進帳をささげて、十方檀那をすすめありきける程に、ある時、後白河法皇の御所法住寺殿へぞ参りたりける。文覚は天性不敵第一のあらひじりなり。是非なく御坪の内へやぶりいり、勧進帳をひきひろげ、高らかにこそ読うだりけれ。

あの高雄に神護寺という山寺がある。長い間修理していなかったので、春は霞にたちこめられ、秋は霧につつまれ、扉は風で倒れ、落ち葉に埋もれて朽ち、瓦葺きの屋根は雨露が漏れ、仏壇がすっかりむきだしになっている。寺に住みこむ僧もいないので、まれに入ってくるものは、月や日の光だけである。文覚はこの寺をなんとしても再興するという大願を立て、勧進帳を携えて、あらゆる人に寺への布施を求めて歩き回ったが、ある時、後白河院の御所の法住寺殿へ推参した。文覚は天性不敵第一のあらひじりである。ためらうことなく中庭に入り込み、勧進帳をひろげて、声高らかに読み上げたのだった。〔勧進帳〕

をりふし御前には太政大臣妙音院、琵琶かきならし朗詠めでたうせさせ給ふ。按察大納言資賢卿拍子とって、風俗、催馬楽うたはれけり。右馬頭資時、四位侍従盛定、和琴かきならし今様とりどりにうたひ、玉の簾、錦の帳の中ざざめきあひ、まことに面白かりければ、法皇もつけ歌せさせおはします。それに文覚が大音声いできて、調子もたがひ、拍子もみな乱れにけり。「何者ぞ。そくびつけ」と仰せ下さるる程こそありけれ、はやりをの若者ども、われもわれもとすすみけるなかに、

ちょうどその時、御前では師長卿が琵琶をかきならし、すばらしい朗詠をなさっていた。資賢卿が、拍子をとって、風俗歌催馬楽を謡っていた。資時、盛定は和琴をかきならして今様をあれこれ謡い、玉の簾、錦の帳の中はにぎやかで、実に楽しかったので、法皇も和して謡われた。そこに文覚の大声が聞こえたので、調子も狂い、拍子もみな乱れてしまった。「だれじゃ。そいつの首を突いてしまえ」とおっしゃるやいなや、血気盛んな若者どもが、われもわれもと飛び出すなかに、

資行判官といふ者、はしりいでて、「何条事申すぞ。まかり出でよ」といひければ、「高雄の神護寺に庄一所寄せられざらん程は、まったく文覚出づまじ」 とてはたらかず。よってそくびをつかうどしければ、勧進帳をとりなほし、資行判官が烏帽子をはたとうってうちおとし、こぶしをにぎってしや胸をついて、のけにつき倒す。資行判官もとどりはなっておめおめと大床の上へ逃げのぼる。其後文覚ふところより馬の尾で柄まいたる刀の、こほりのやうなるをぬきいだいて、寄りこん者を突かうどこそまちかけたれ。左の手には勧進帳、右の手には刀をぬいてはしりまはるあひだ、思ひまうけぬにはか事ではあり、左右の手に刀をもったる様にぞ見えたりける。公卿殿上人も、「こはいかに、こはいかに」とさわがれければ、御遊もはや荒れにけり。院中の騒動なのめならず。

信濃国の住人、安藤武者右宗、其比は当職の武者所でありけるが、何事ぞとて太刀をぬいてはしりいでたり。文覚喜んでかかる所を、きってはあしかりなんとや思ひけん、太刀のみねをとりなほし、文覚が刀もったる腕をしたたかにうつ。うたれてちっとひるむところに、太刀をすてて「得たり、をう」とて組んだりけり。組まれながら文覚、安藤武者が右のかひなをつく。つかれながらしめたりけり。互におとらぬ大力なりければ、上になり下になり、ころびあふところに、かしこがほに上下寄って、文覚がはたらくところのぢやうを拷してンげり。されども文覚是を事ともせずいよいよ悪口放言す。門外へ引き出だされ、ひっぱられて立ちながら御所の方をにらまへ、大音声をあげて、「奉加をこそし給はざらめ、これ程文覚にからい目を見せ給ひつれば、思ひ知らせ申さんずる物を。三界は皆火宅なり。王宮といふとも、其難をのがるべからず。十善の帝位にほこつたうとも、黄泉の旅にいでなん後は、牛頭馬頭の責をばまぬかれ給はじ物を」と、躍りあがり躍りあがりぞ申しける。「この法師、奇怪なり」とて、やがて獄定せられけり。さるほどにその比大赦ありしかば、文覚程なくゆるされけり。しばらくはどこにもおこなふべかりしが、さはなくして、又勧進帳をささげてすすめけるが、さらばただもなくして、「あっぱれこの世の中は、只今乱れ、君も臣もみなほろびうせんずる物を」など、おそろしき事をのみ申しありくあひだ、「この法師、都においてかなふまじ。遠流せよ」とて、伊豆国へぞながされける。

資行判官という者が走り出て、「何を申すか。出て行け」と言ったので、「高雄の神護寺に荘園を一つ寄進しないうちは、この文覚、絶対に出ていかぬ」といって動かない。そこで首を突こうとすると、勧進帳を持ちなおし、資行の烏帽子をばさっとたたき落とし、にぎりこぶしで胸を突いて、仰向けにつき倒す。資行は髻がまる見えになりおびえて建物の縁に逃げのぼる。そのあと文覚は懐から馬の尾の毛で柄を巻いた、氷のように光る刀を取り出して、寄ってくる者を突こうと待ち構えた。左の手には勧進帳、右の手には刀を抜いて走り回るが、予期せぬ出来事であり、左右の手に刀を持っているように見えたそうだ。公卿殿上人も「これはどうしたこと」と騒いだので、楽の御遊は混乱してしまった。院の中の騒動はただごとではない。信濃国の住人、安藤武者右宗は、そのころ現職の武者所の武士であったが、何事だと言って太刀を抜いて走り出た。文覚が喜んでむかってくる所を、斬ってはまずかろうと思ったのだろうか、太刀のみねをつかみなおして、文覚が刀をもっている腕をしたたかに打つ。打たれてちよっとひるむところに、太刀をすてて「よし、やったぞ」と言って組み合った。組まれながら文覚は、安藤武者が右の腕を突く。突かれながら絞める。互におとらぬ大力だったので、上になり下になり、ころびあふところに、得意げに大勢がかけ寄って、文覚が身動きできないようにした。けれど文覚はこれをもとともせず、ますますわめき立てる。門外に引き出され、ひっぱられて立ったまま御所の方をにらみつけ、大声をあげて、「寺に寄進をなさらないのはしかたがない。だが、これほど文覚をつらい目にあわせたからには、思ひ知らせてさしあげよう。三界は皆火宅である。王宮といえども、その難をのがれることはできない。十善の帝位を誇っても、黄泉の旅に出たあとは、牛頭馬頭の責めからのがれることはないのだ」と、躍りあがり躍りあがりして言った。「この法師め、けしからん」と言って、すぐに獄に入れられた。そうこうするうち、大赦があったので、文覚はすぐにゆるされた。しばらくはどこかで仏道修行をしていればよいのに、そうはしないで、また勧進帳を捧げて寄進をすすめたが、ただならぬことに、「ああこの世の中は、すぐさま乱れ、君も臣もみな滅び去ってしまうのだ」などと、おそろしいことばかり触れあるくので、「この法師は、都におくわけにはいかぬ。遠流せよ」と言って、伊豆国へながされた。

禁無断転載　©nozawa chikako

（福原院宣）

文覚は近藤四郎国高といふ者に預けられて、伊豆国にぞ住みける。さる程に兵衛佐源頼朝殿のもとへ常は参って、昔今の物語ども申してなぐさむ程に、ある時文覚申しけるは、「平家には小松の大臣殿重盛卿こそ心も剛に、はかり事もすぐれておはせしか、平家の運命が末になるやらん、去年の八月薨ぜられぬ。いまは源平のなかに、わとの程将軍の相もったる人はなし。はやはや謀反おこして、日本国したがへ給へ」。兵衛佐、「思ひもよらぬ事宣ふ聖御房かな。われは故池の尼御前に、かひなき命をたすけられ奉って候へば、その後世をとぶらはんために、毎日に法花経一部転読する外は他事なし」とこそ宣ひけれ。文覚かさねて申しけるは、「天のあたふるをとらざればかへッて其とがをうく。時いたっておこなはざればかへってそのわざはひを受くといふ本文あり。かう申せば御辺の心をみんとて申すなンど思ひ給ふか。御辺に心ざしのふかい色を見給へかし」とて、ふところより白いぬのにつつんだる髑髏を一つとり出だす。「これこそわとのの父故左馬頭殿のかうべよ。平治の後、獄舎のまへなる苔のしたにうづもれて、後世とぶらふ人もなかりしを、文覚存ずる旨あって、獄守に乞うてこの十余年頸にかけ、山々寺々拝みまはり、とぶらひ奉れば、いまは一劫もたすかり給ひぬらん。されば文覚は故頭殿の御ためにも奉公の者でこそ候へ」と申しければ、兵衛佐殿一定とはおぼえねども、父のかうべと聞くなつかしさに、まづ涙をぞながされける。

その後はうちとけて物語し給ふ。「そもそも頼朝勅勘をゆりずしては、いかでか謀反をおこすべき」と宣へば、「それやすい事、やがてのぼって申しゆるいて奉らん」。「さもさうず、御房も勅勘の身で人を申しゆるさうど宣ふあてがひやうこそおほきにまことしからね」。「わが身の勅勘をゆりうど申さばこそひが事ならめ、わとのの事申さうはなにか苦しかるべき。いまの都福原の新都へのぼらうに三日に過ぐまじ。院宣うかがはうに一日が逗留ぞあらんずる。都合七日八日には過ぐべからず」とてつき出でぬ。

文覚は近藤四郎国高という者に預けられて伊豆国に住んだという。そのうち兵衛佐源頼朝殿のもとにいつも参上し、昔や今の話をして慰めていたが、ある時文覚が言うには、「平家の中では小松大臣重盛卿が意志も強く、謀略に優れていましたが、平家の運命もおわったのでしょう、去年の８月に亡くなりました。今となっては、あなたほど将軍の相を持った人はいません。早く早く謀反をおこして、日本の国を従えなさい」。頼朝は、「思いもよらぬ事をいう聖御房ですな。私は故池禅尼に、つまらぬ命を助けられましたので、その後世を弔うために、毎日法華経一巻を読誦するだけです」といった。文覚が重ねて言うには、「天が与えたものを受けとらなければかえって咎められる。時期が到来したのに行わなければかえって災いをこうむるという言葉がある。このように言うとあなたの心をためしているとお思いか。あなたに強い期待をいだいている証しをご覧なさい」と言って、懐から白い布につつんだ髑髏をひとつ取り出す。「これこそあなたの亡き父、義朝殿の頭の骨だ。平治の乱のあと、獄舎の前の苔の下に埋もれて、後世を弔う人もいなかったので、この文覚、思うところがあって、獄守に頼んで受け取り、この十年あまり首にかけ、山々寺々で拝んで回り、弔ってさしあげたので、いまでは長い責め苦から解き放たれているでしょう。だからこの文覚は、亡き義朝殿のためにも力を尽くした者なのです」と言ったので、頼朝殿は完全に信じたわけではないが、父の頭の骨と聞くなつかしさで、まず涙を流された。

その後はうちとけて話をなさる。「そもそもこの頼朝は、勅勘のお許しがなければ、どうして平家に謀反を起こせるのか」と言えば、「それはたやすいこと、すぐに上京してお許しを願い出ましょう」「それはそうだが、御房も勅勘の身、他人の私の許しを願い出る役目を買って出るなどとても本当とは思えない」「わが身の勅勘を許してほしいと言えば誤りだが、あなたのことを願い出るのは、全く問題ない。今の都の福原に上るには三日はかかるまい。院宣をいただくのに一日は逗留するだろう。あわせて七、八日あればまにあう」といって飛び出した。

げにも三日といふに福原の新都へのぼりつく。「伊豆国流人前兵衛佐頼朝こそ、勅勘をゆるされて院宣をだにも給はらば、東国八カ国の家人ども催しあつめて、平家をほろぼし、天下をしづめんと申し候へ」とて奏しければ、法皇やがて院宣をこそくだされけれ。

文覚、これをくびにかけ、また三日といふに伊豆国へくだりつく。兵衛佐、『あつぱれこの聖御房は、なまじひによしなき事申し出だして、頼朝又いかなるうき目にかあはんずらん』と、思はじ事なう案じつづけておはしけるところに、八日といふ午刻ばかりくだりついて、文覚、「すは院宣よ」とて奉る。兵衛佐、院宣と聞くかたじけなさに、手水うがひをして、あたらしき烏帽子浄衣着て、院宣を三度拝して、ひらかれたり。

この院宣をば、錦の袋にいれて、石橋山の合戦の時も、兵衛佐殿頸にかけられたりけるとかや。

実際に三日で福原の新都に上り着く。「伊豆国の流人前兵衛佐頼朝は、勅勘を許されて院宣さえいただければ、東国八カ国の家人たちを呼び集めて、平家を滅ぼし、天下を鎮めると申しております」と言ったので、法皇は即座に院宣を下された。

文覚は院宣を首にかけ、また三日で伊豆国に下り着く。頼朝は『ああ、この聖御房は頼んでもいないのにつまらないことを言い出して、私はまたどんなつらい目にあうのだろう』と心配し続けていたところ、八日目の正午ごろにもどってきて、文覚は「さあ院宣だ」と差し出す。頼朝は院宣という畏れ多さに、手を清めうがいをして、あたらしい烏帽子と白い浄衣を着て、院宣を三度拝んで開いた。

この院宣を、錦の袋に入れて、石橋山の合戦の時も、頼朝殿は首にかけていたということだ。

禁無断転載　©nozawa chikako